

## ニュージーランド滞在記 (2007.8.8~9.4)

◇愛するシオン教会の皆さんへ..

◇懐かしのニュージーランド(NZ)へ戻ってきて5日が経ちました。最初は「コリアンエアー(大韓航空)は嫌だなあ..」と思っていましたが、大間違いでした。〇〇空港から2時間半あまりでインチョン(仁川)国際空港に着きました。さすがにハブ空港を標榜するだけのことはあります。フライトまで3時間ほどあったので、帰国の際に宿泊するホテルへ行き、予約の確認をしました。このホテルは空港内にあります。それも入国審査を受ける必要のない場所(つまりは、乗り換えのための待合スペースの中)に位置しています。そのため、搭乗口付近のイスに座って夜明けを待つ必要がありません。エコノミー症候群を避けるために、そのホテルの横にあるお店で、足部と足裏マッサージを受けました。ああ、癒されたああ..。でも、40分で6千円は高いなあ！

◇今回は、座席にかなりゆとりがあったため、横の座席を4人分占有して、足を伸ばしてグッスリと眠ることができました。目を覚ますと、オークランド国際空港へ着きました。NZの新鮮な空気がボクの頬を渡ってゆきました。今回は急ぐ日程ではないため、その日は空港近くのモーテルに宿泊しました。空港から電話をすると迎えに来てくれるのです。

◇翌朝(木曜日)、空港からレンタカーで2時間あまり走り、ボクのふるさとである網走郡美幌町との姉妹都市であるケンブリッジへとやって来ました。予約してあったモーテルに着くと、友人のウェンディからメモがあり「6時に迎えに行くから！」とありました。

◇モーテルから車で数分のところにウェンディのお家があります。食事をしながら、つもる話を3時間。やがて息子が帰ってきました。来年はブリスベン(オーストラリア)へ行って働きたい、とのこと。「だって、暖かいところがいいもん！」とのこと。ケンブリッジの職員であった彼女とは、最初は姉妹都市関連のことで、やりとりを重ねてきたのですが、次第に深い信頼関係を築くようになりました。ウェンディや首長たちが美幌を訪問した時も、1週間、まさに24時間、密着同行してお世話をしました。

◇その翌朝、親しい友人であったマーレイが眠るお墓へ花束を持って墓参。レガッタの練習中に、脳溢血で急死してしまったのです。彼とは15年余りの、もう本当に親しい関係でした。涙があふれました。

◇その夜は、マーレイの連れ合いさん(ロビン)のお家に夕食に呼ばれました。マーレイが、細やかな配慮のできる人物であったのに対して、ロビンは歯車のピンが何本か抜けてしまっているような女性です。二人とも、底抜けに気の良い人たちでした。それでも、マーレイの急死後のストレスからかガンに冒されてしまいました。

◇いつものことながら、ロビンがボクに、「どうしてこの家で泊まらないのか？」と聞くのです。「三人の子どもたちも皆、ケンブリッジを離れてしまったので、今ではこの広い家に自分ひとりだ..」と淋しそうでした。そして三人の子どもたちに電話をしました。息子二人(リズとダル)はロンドンで働いています。娘(アリーシャ)は大学生で、ウェリントンにいます。ボクも話しました。この子どもたちが幼い頃から親しくしてきたのです。末娘のアリーシャは甘えん坊さんで、いつもボクの横にいました。そして皆、美幌を訪問してくれました。マーレイは4度、ロビンは2度、美幌を訪問してくれました。そして姉妹都市提携のために尽力してくれたのです。

◇さてさて、ボクが在外研究を過ごしたケンブリッジの近くのハミルトン市にあるワイカト大学へ行き、必要な調査活動をしたり、ワイカト病院を訪問したり、閉鎖されてしまった大規模福祉施設の跡地をチェックしたり、といったお仕事をこなして、今日(土曜日)に、ケンブリッジから60キロ離れたところにあるロトルアへやって来ました。ロトルアとは「ロト=湖」「ルア=第2」というマオリ語の意味です。すなわち、NZで二番目に大きな湖がロトルア湖だからです(一番大きな湖はタウポ湖で、琵琶湖と同じ大きさです)。ロトルアは、この国の先住民族であるマオリ人たちが数多く住んでいます。国全体では約15%です。ちなみに、この国の公用語は英語とマオリ語です。

◇ロトルアへは、これまで何度も来たことがあります。人口が6万人ほどです。でも今回、滞在するモーテルには一度も泊まったことがありませんでした。あ、モーテルとは、1DKほどの広さの民宿を意味します。部屋には「ダブルベッド+シャワー+トイレ+キッチン+冷蔵庫+調理器具+TV+電話」等が備わっています。今回は交渉して、1泊あたり千円程度、安くしてもらいました。今は冬なのでオフシーズンだからです。

◇最大の懸念材料がインターネットの接続環境でした。無線 LAN が使える、とのことだったのですが、はたしてうまく接続できるかどうか、不確かでした。そこでさっそく、チャレンジ。しかしつながりません。モーテルのオーナー（と言っても、部屋数は全部で7部屋）がやって来て、一緒に「あ～でもない、こ～でもない」と、二人で40分あまり。でもつながりません。「もしもつながると、2週間ではなく、3週間滞在したい！」と伝えました。「最初からそのつもりさ！」とオーナーが当然のように答えます。やがて、「自分のパソコンを持ってきてみるから」と言って、「ほら、自分のはちゃんとつながっているよおお！」「自分のパソコンは日本製（東芝）なのに、どうしてお前のは米国製（IBM）なのか？」と、ボクから笑いを取ろうとします。でもボクは必死！ つながらないと仕事にならないからです。

◇やがて、「あ、そこをクリックだ！」とオーナーが直感で言いました。日本語は読めないはずなのに…。しかし、直感というのは恐ろしいものです。バッチリつながりました。思わず二人はしっかりと手を握り合いました。深い絆が結ばれた瞬間です。そして、「ああ、これでようやく自分もランチが食べられるう…」とオーナーは嬉しそうにつぶやきました。なんだ、そうだったのかあ！

◇徒歩で5分くらいのところにイオン・ショッピングセンターのような大きなモール街があります。20年前は、ここはロトルア駅だったのです。そのため、買い物には、とても便利です。街の中心街までは徒歩で10分。そして湖までは15分ほどです。1日あたり1万円もするため、月曜日にはレンタカーを返すので、モーテルが便利な場所にあるのは感謝です。スーパーには「讃岐うどん」も並んでいます。でもNZ国内で生産されているものですが…。もちろん、お米も容易に手に入ります。ふりかけも、味噌汁も、豆腐だって…。この国は日本食ブームなのです。ダイエットに良いのだそうです。それに、それに、大好きな「柿」もあります。リンゴも美味しいです！

◇さてさて、ロトルアは硫黄温泉の街です。そのため、街を歩いていると硫黄の臭いがします。気にはならない程度ですが…。だから精密機械がしばしばダウンするのだそうです。はたしてボクのパソコンは大丈夫だろうか？ このモーテルにも、二つの小さな温泉があります。部屋の裏玄関の前が露天風呂です。ショートパンツをはいて入りました。その後、部屋のシャワーで身体を洗います。モーテルには洗濯機もあります。「ランドリー」では通じません。「ロウオンドリー」といった発音になります。オーナーの連れ合いさんが、使い方を教えてくれました。新しいタイプなのでラッキーでした。洗剤はスーパーで買ってきました。

◇と、まあ、徒然なるままに書き綴ってきた今回の旅日記は、これでオシマイです。ボクが生きていれば、また土曜日の夜には送信しますので、リネさんに「土曜日も、日曜日の朝にはメールを開いておくれ？」と、願いをしておいてください。もしも届いていなかった場合は、接続がうまくゆかなかったか、南半球でお星様になってしまったか、のどちらかです。

◇あすの礼拝は、ロトルア湖畔にある、マオリのアングリカン教会へ行きます。その教会では、英語とマオリ語とで礼拝が行われるのです。それでは、しばしのお別れです！ あ、メールは通じますので、必要があればご連絡ください。

-----  
愛するシオン教会の皆さまへ…

◇ニュージーランドに来て、10日あまりが経ちました。1週間前から滞在しているロトルアは、まだ冬の最中で、連日、寒い日が続いています。ときには、吐く息さえも白くなります。よく、「一日の内に四季がある」と称されます。それだけ朝夕の寒暖の差が激しいのです。

◇そんな毎日ですが、それなりに充実した休暇を満喫しています。モーテルから徒歩で20分あまりでロトルア湖に行くことができます。そこのピザハットでランチを食べます。そして湖畔のティールームでお茶を飲みま

す。図書館も徒歩15分です。図書館には日本語の書籍が50冊ほどあり、その内の何冊かは、以前、ボクが寄贈したものです。と言っても、すべて、ブックオフで購入した105円の文庫本ですが…。今回は、20冊あまり寄贈できそうな感じです。オーストラリアやニュージーランド各地の図書館には、そうやってボクが寄贈してきた文庫本が、もう100冊以上です。

◇昔は国外に出ると情報過疎状態に陥り、寂しかったものでしたが、今ではメール環境もバッチリですし、インターネットの接続速度も、まあまあ満足できる速度のため、NHKをはじめ、各放送局の動画ニュースもみることができます。「Web ○○」や「○○新報」のサイトもチェックできます。もっとも、ブロードバンド環境は日本の方が進んでいますが…。幸い、滞在しているモーターでは「Wi-Fi」の無線LANを無料で利用できるため、ラッキーです。

◇ロトルアには中国系や韓国系の食料品店があるため、「うどん」や「インスタントラーメン」等も買うことができます。便利になったことを感じます。15年前に、1年間、この国に滞在していた時には、ラジオの短波放送を聴いたり、日本人の旅行者たちから日本の状況を教えてもらったりしていました。それを思うと隔世の感があります。もっとも、その分だけ、ボク自身が興奮したり、緊張したりすることが少なくなってきた、とも言えますが…。

◇そんな日々ですが、この国のポリテクカレッジ(高等職業専門学校)には知的制約者のための学習コースがあり、そこに出かけたり、精神保健センターに出かけたり、といった「お仕事」も少しだけしています。また、知的制約者への福祉支援サービス機関(IHC)があり、その作業所に時どき遊びに行っています。やはりボクは、そうした当事者本人たちと交わっているのが、いちばん心が安まるみたいです。

◇先週は、マオリの英国国教会(アングリカンチャーチ)へ行きましたが、レンタカーを返してしまったため、距離的にその教会まで行くのは無理です。幸い、モーターの近くに長老派の教会とカトリックの教会があるため、そこへ行くつもりです。この国のクリスチャン人口は15%くらいなので、その分だけ教会があるので感謝です。

◇部屋の前に3メートルほどの小さな温水プールがあるのですが、今夜、泊まる家族が利用しています。その横には小さな硫黄温泉があり、オフシーズンで宿泊者があまりいないせいか、ほぼ毎晩、ボクひとりが独占して使っています。まるで湯治客のようです。穏やかな週末のひとつきです。それでは、また来週の土曜日に滞在レポートを送ります！(2007/08/18)

---

主にあつて、愛するシオン教会の皆さまへ…

◇ニュージーランドにやって来て、3週間近くが経ちました。滞在地のロトルアは次第に春らしさを増し加えつつある今日、この頃です。それと共に、いつものことですが、私の場合、「花粉症」に悩まされる日々です。

◇穏やかな春の日差しを受けながら、ゆとりの日々を過ごしていますが、そうした中でも、精神疾患者への福祉支援サービスに関して、現地のさまざまな支援機関の見学やインタビューを通して学びを深めています。

◇この国が大規模収容型による福祉支援から、施設解体・閉鎖による地域福祉支援へと、そのシステムを転換し始めたのは15年ほど前からです。したがって、この国には、もう、例えば○○学園などのような施設は存在しないのです。皆、地域のグループホーム等で生活しているからです。同じく、精神病院の解体・閉鎖に伴う退院促進支援事業を展開してきました。ロトルアは人口6万人ほどです。さらには周辺地域を加えると8~10万人ほどの人口規模ですが、ロトルア病院に附設されているユニット(「病棟」とは言いません)のベッド数は、わずかに12ベッドです。つまり大半の精神疾患者たちは、病院ではなく、地域の居住型支援施設で生活をしているからです。

◇今週、そのユニットをいくつか見学しました。日本の場合、精神病院には開放病棟と閉鎖病棟とがあり、明確に区切られています。しかし、このユニットは、わずかに12ベッドのため、同じフロアに鍵がかかる部屋と、オープンスペースの部屋とが並んでいるようなスタイルです。ちなみに日本の精神病院の場合、その大半

が民間病院です。そのため、数年前からようやく国としての方針が定められた、社会的入院(病院外での受け皿がないために入院している)といわれる7万人近くの入院患者たちの退院促進支援事業が、なかなか進展しないのです。つまりは退院患者が増えると、それだけ患者さんが減ることになり、病院経営が難しくなるためです。

◇ともあれ、私が滞在しているモートルの近くにも、そうした支援機関があり、そこでは10名あまりの当事者たちが生活をしていました。もちろん、皆、個室です。さらには、ごく通常の住宅街に位置しています。看板すらありません。「〇〇ストリートの、ナンバー〇〇」といった、通常の住宅の住所表記と同じです。かつては地域住民たちからの不安の声が聞かれたものでしたが、今ではおおむねクリアされています。15年の歩みの結果です。つまりこの分野の福祉支援の場合は、わが国よりも15年、先んじた取り組みが展開されているのです。

◇来週は、親しくなった支援機関のスタッフが、ロトルアから100キロほど離れたタウポでの支援サービスを行うために出かけるので、一緒に行かないか？ とのお誘いがあり、行くことにしました。それでは、今回はこれで失礼します。今回は木曜日の夜に最終レポートを送信します。そして、9月4日に帰国します。(2007/08/25)

---

愛するシオン教会の皆さまへ..

◇春の兆しが見え始めてきたニュージーランドから、これが最後のレポートとなります。ロトルアで過ごした、この三週間は、日中の活動を終え、毎晩、硫黄温泉にゆったりと浸かり、ご飯を炊いて食べていました。

◇さて、ここしばらくは精神的な病を抱えた当事者たちへの福祉支援サービスの実際について学んでいました。一昨日は精神保健センターのスタッフと、ロトルアから100キロ離れたタウポ( Taupo )まで行きました。タウポ湖は、琵琶湖と同じくらいの広さです。そこで、新たに当事者家族への支援活動が開始されることになったからです。ゆくゆくはセルフヘルプ(自助)グループとしての活動にもってゆきたい、とのことでした。

◇そのミーティングには、地元の新聞記者もやって来て、熱心な取材が行われました。ボクに対しても、日本との制度面での違いや、どうしてこの国の精神保健福祉活動に関心を有しているのか？ 等々といったインタビューを受けました。そこで、「日本の場合、定住外国人や、アイヌ民族が存在していながら、今なお単一民族的な国家意識が強いために、人間としての、さまざまな在り方を受け容れることが困難な国民性を有していることと、障害者差別禁止法が制定されていないことが最大の問題点である」、との視点から答えました。ちなみにニュージーランドは、先住民族であるマオリ民族の言葉(マオリ語)と英語とが公用語です。

◇この国の場合、当事者の大半は、すでに精神科病棟ではなく、地域のグループホームで生活しています。昨日、訪れたホームは、メゾジスト教会の隣にありました。土地は、その教会の所有だそうです。ちなみに、この国の場合、「表札」はありません。郵便受けに表示されている「番号」のみです。したがって「〇〇ロード&〇〇ストリート&〇〇アベニューの〇〇」となります。そのため、ここが当事者たちが生活している場所であることは、まったく分かりません。ごく通常の住宅街の風情です。それに対して日本の場合、生活寮(援護寮)は精神病院の敷地内か、大きな看板が出ている施設の敷地内に位置しています。退院促進支援事業でつくられ始めた地域生活移行施設も病院の敷地内に建てられることが多くなっています。〇〇市にある「〇〇病院」の場合もそうです。しかし、こうした細かな部分が、実はとても重要なのですが..

◇ともあれ、この国の場合、教会は公民館的な役割も果たしており、そのため、平日の日中には、さまざまな地域活動が展開されています。この教会にも体育館がありました。まさにコミュニティ・センターです。その点から言うと、日本の教会の場合、活動スペース上の制約もありますが、地域の人たちにとって敷居が高いような気がしています。

◇そろそろ夜明けです。今日は滞在地のロトルアから海岸線を走って、再び、ふるさとである美幌町との姉妹都市のケンブリッジへ行きます。今夜は、ボクの親しい友人や知人たちが夕食会を開いてくれることになっているからです。そして、その後は、海辺(テームズ)で数日間を過ごし、9月4日にインチョン(仁川)経由で〇〇へ戻ります。それでは、また教会で！ (2007/08/31)